

スペイン語のジェンダー における排除と包摂

糸魚川美樹

いといがわ・みき

1. はじめに

排除と包摂は、ことばとジェンダーを考えるとよく用いられてきた概念である。本稿でとりあげるスペインでは、1970年代のフェミニズムの隆盛とともにスペイン語における女の排除・包摂が議論¹⁾となり、現在も続いている。

以下では、女性・男性という分類の文法上の性を持ち、男を表す語が総称的な用法を持つことが「文法」として組み込まれているスペイン語について、20世紀後半から現在までのスペインの文脈での「排除」「包摂」に関する議論を追う。

前半では、スペイン語の人を表す名詞の性について説明し、それが「女性差別」とどのように結びつき、非性差別的な言語使用を実現するためにどのような提案がなされたかを紹介する。また、今世紀になってSNSを通じて広がった、女性形でも男性形でもない語尾-eと、あらたに登場した「包括的言語使用」(lenguaje inclusivo) の概念について述べる。これらを踏まえ、後半では、文法上の性が政治の場面でどのように議論されてきたかについて、左派政権の政策とそれに否定的な立場を表明したスペイン王立学士院の論理を批判的に検討する。最後に、スペインにおける政策としての包括的言語使用のあり方を再考する。

2. スペイン語のジェンダーに関する包摂と排除をめぐる議論のはじまり

2.1. スペイン語とジェンダー

スペイン語は、ロマンス諸語の一つで文法上の性を有する言語である。文法上の性は名詞の分類で、冠詞、形容詞、代名詞の呼応が求められる、というのが言語学的な説明である。この名詞の分類には、他のロマンス諸語と同じく、社会的カテゴリーである性別（女性、男性）が用いられている。たとえば「机」mesaは女性名詞、「本」libroは男性名詞のように、あらゆる名詞が女性か男性に分類されている。「机」、「本」という名詞とその性には意味的な関係がなく、前述のように呼応の問題とされる。女性名詞は、女性形の冠詞、形容詞、代名詞を要求し、男性名詞は男性形の冠詞、形容詞、代名詞を要求する。このような規則を「性の一致」と呼ぶ。一方、人を表す名詞では、persona「人」のように誰を指しても常に女性名詞という通性名詞と呼ばれるものもあるが、親族や人間関係を表す名詞、職業名詞の性は、指示対象の性に一致して使われる。また、性の対立は語形の対立を伴うことが多い。たとえば、エルニーニョ現象で日本語話者にもなじみのある「ニーニョ」niñoは「男の子」という意味で、「ニーニャ」niñaは「女の子」、「アミーゴ」amigoは「男友だち」、「アミーガ」amigaは「女友だち」で、それぞれ男性形、女性形である。スペイン語の性における語形の対立は、同じロマンス諸語のフランス語やイタリア語に比べると単純で、女性形語尾は-a、男性形語尾は-oというように-aと-oの対立として説明されることが多い²⁾。人を表す名詞では、文法上の性と指示対象の性、語形という3要素の一致が求められる。

スペイン語の名詞には「中性」という分類はない。指示対象の性別が不明な場合や総称的な表現には男性（形）を使用するというのが規範的用法である。すなわち、文法上の女性対男性では、男性（形）が無標である。女性（形）は指示対象が女であることが明白な場合にのみ用いられるため有標とされる。日本語の「子ども（たち）」、「友だち」のような性に言及していない表現では、スペイン語では男性複数形が使われるのが一般的である。また、女性と男性の対としての「両親」、「祖父母」、「新郎新婦」などについても男性複数形で表す。